



彗星30年

「うちゅう」の創刊が1984年、その翌年1985年、甲子園ではバース、掛布、岡田の3連続ホームランが飛び出し、阪神タイガースは日本一に輝いた。カーネルサンダースが道頓堀川に沈み、ちょうど回帰を迎えていたハレー彗星のおかげで、阪神が優勝できたという珍説まで飛び出し、次に阪神が優勝するのは76年後である、などとささやかれた。

ハレー彗星(1P)は、1985年の後半から話題になり始め、近日点通過は1986年2月、その後4月頃まで明るい彗星として観測された。当時中学生だった筆者は、同級生とともに、2月の夜明け前にハレー彗星を見ようと待ち構えていたが、その姿を見ることはできなかった。カメラ好きだった友人が、標準レンズでの固定撮影で写した写真に、小さく写った彗星の姿を見て、こんなに小さいのかとがっかりした記憶がある。私がハレー彗星を自分の目で見たのは4月24日、ちょうど皆既月食の夜であった。月夜では彗星は見えずらい。だが皆既月食中ならば、月明かりもほとんど無くなるので、この日が遠ざかっていくハレー彗星を見るチャンスだ、というような新聞記事をアテにして、父から借りた双眼鏡を手にハレー彗星を探した。確かに、それはあった。からす座のそばに、明らかに普通の星ではない丸くぼんやりとした姿を見た。しかし、それだけであった。彗星らしいしっぽなど、当時の筆者には全く見えなかった。

今にして思えば、何も知らない中学生でもカメラに写すことができ、新聞の星図程度を頼りに双眼鏡で見つけられるのだから、やはりハレーすい星は大彗星だったに違いない。もしも当時の自分に、現在の自分ほどの知識と経験と技術があれば、間違いなく大彗星の姿を存分に捉えていただろう。しかし、当時の自分にとっては、世間が騒ぐほどのハレー彗星でも、こんなちっぽけなものか、という感想しかなかった。

高校3年の11月、岡崎・レビー・ルデンコ彗星(1989r = C/1989Q1)が現れた。当時、自分の寝室が東向きの部屋だったので、夜明け前の暗い内に早起きしては東の窓から双眼鏡で彗星を追った。しっぽは分からなかったが、丸くにじんだ光が毎日星座の中を位置を変えていくのを見て、彗星が太陽の周りを公転することを実感したのだった。

大学に入る前後、オースチン彗星(1989c1 = C/1989X1)が大彗星になりそうだと話題になり、ずいぶん期待したのだが、この彗星を実際に見た記憶は無い。期待された程に明るくならなかったのだが、それ以上に、その直後に現れたレビー彗星(1990c = C/1990K1)の印象が強すぎた。私にとっての、初めて肉眼彗星であった。しっぽはほとんど分からなかったが、地球との距離が近かったこともあって、ずいぶん大きく見えた。空に月ほどの大きさの、薄ぼんやりとした天体

が浮かんでいる、というのは非常に不思議な光景だった。

学生時代は時間が自由に使えたこともあり、8等～6等程度の彗星をいくつも観察してはいたが、レビー彗星が去った後は、記憶に強く残る彗星はしばらく現れなかった。久しぶりの立派な彗星に出会ったのは、デビコ彗星(122P)だった。最盛期には肉眼でもその存在を認めることができ、望遠鏡ではずらりと細く伸びた長いイオンテイルを見ることができた。自分にとって初めての、しっかりした尾が見えた彗星だった。大学の授業などそっこのけで追いかけた。

その興奮もさめやらぬ1996年2月、百武彗星(C/1996B2)発見の報を知る。発表された軌道要素から計算すると、地球にかなり接近する明るい彗星になる。そして、3月、期待通りに、いや、期待以上に百武彗星は立派になった。しかも、地球に接近する軌道なので、毎日の移動量が大きい。見るたびに位置が大きく変わり、そして、ぐんぐん明るくなり、尾も長くなる。最盛期は天気予報を見ながら晴れるところを目指して、ほぼ毎日観察した。最盛期はほんの2～3日だったと思う。信じられないほどの長い尾を目にした。古い時代、彗星が畏怖の対象であったことが素直に受け入れられた。わずか1日でも彗星は姿を変えるということを実感した彗星でもあった。

翌1997年春にはヘル・ポップ彗星(C/1995O1)が大彗星となった。幅の広い立派なダストテイルを肉眼で見たのはこの彗星が初めてだった。百武彗星と違って、急激な見え方の変化もなく、良く見える期間が長かったこともあって、逆に「あの日の彗星がすごかった」という強い印象を残さなかったが、紛れもなく大彗星だった。

百武、ヘル・ポップという大彗星を見てしまうと、どうしても、並の彗星では満足できなくなってしまう。それでも2000年代に入ると、池谷・チャン彗星(153P)、リニア彗星(C/2002T7)、マックホルツ彗星(C/2004Q2)、ルーリン彗星(C/2007N3)、ホームズ彗星(17P)など、記憶に残る彗星を見た。リニア彗星(C/2002T7)はオーストラリアへ行くチャンスがあり、肉眼で尾の伸びた姿を見ることができた。南半球で大彗星となったマックノート彗星(C/2006P1)、やラブジョイ彗星(C/2011W3)は、残念ながら見ていない。

2013年、パンスターズ彗星(C/2011L4)、アイソン彗星(C/2012S1)、ラブジョイ彗星(C/2013R1)を見た。いずれも個性的で、これからも記憶に残る彗星だが、百武彗星やヘル・ポップ彗星には遠く及ばない。2000年以降で、肉眼で尾が見えるほどの大彗星は、マックノート(C/2006P1)、ラブジョイ(C/2011W3)、リニア(C/2002T7)と、みな北半球ではほとんど見えない彗星ばかりだった。そろそろ北半球にも大彗星がやってきてもいい頃だと思うのだが。

飯山 青海(科学館学芸員)